

第 7 回まちづくり戦略会議

平成 17 年 1 月 13 日(水)  
午後 2 時から午後 4 時  
市 役 所 本 館 6 階  
第 4 委 員 会 室 に て

司会

ただいまから第7回まちづくり戦略会議を開催いたします。本日は大浦委員、大川委員、熊谷委員がご欠席でございます。

事務局からでございますけれども、第5回の議事録、それから第6回の議事録の原稿をお送りいたしました。それから併せまして、本日の議題に関連いたします産業関連の統計データも事前にお送りいたしております。議事録につきましては従来どおり点検をお願いいたします。

本日の資料でございますが、本日の議題に関連いたしまして4名の方から資料のご提供がございました。まず与田座長からザ・ファーマーズダイナーの資料でございます。それから及川委員から新潟県都市計画基本方針の資料、西條委員からインキュベーション事業に関連した資料、それから本日ご欠席でございますけれども熊谷委員から日本政策銀行さんで進めておられます地域づくり活動中期ビジョン案についての資料がございましたので、お手元にお届けをいたしております。事務局から以上でございます。座長よろしく願いいたします。

与田座長

それでは皆様、新年明けましておめでとうございます。去年はひどい年でしたが、ぜひことしはいい年になるようにと思っております。

この会も第7回目になりました。本日のテーマは食に関するもの、産業関係のもの、これらは以前に都市像の検討の中でやりましたけれども、その各論に入っております。本日は事務局から資料が行っていると思いますが、1つ目が食と花を切り口にした都市の魅力の発信というもの、これに関してのアピール手法や、花の新潟という都市景観についてのご意見を願います。2つ目として、産学官が連携した産業の振興について具体的な連携の方法の事例、連携して効果の出る産業、それぞれの役割についてご意見を願います。

本日は4時まででございますから、食と花から始めまして、もしいけば産業振興までいきたいと考えておりますので、よろしくご協力をお願いいたします。

それと、お手元に4つの資料が行っております。

まず市長のほうから、この食、花、産業について一言いただいてから入っていきますのでよろしく願います。

篠田市長

ことしもよろしく願いいたします。食と花を政令市の1つの売りにしていこうということはいろんな方から出していただいて、私もも今のところその方向でいきたいと考えております。食と花を切り口にして新潟を世界都市にしていくということなんですが、それを実現する先導プロジェクトとして、食と花の世界フォーラムというのを政令指定都市

になったら始めたらどうかと考えております。

1つは新潟地域、新市の自給率が他の政令指定都市とか東京なんかと比べるととてつもなく高く61%ということがあるわけで、新潟は今までの日本の大都市と違うものを持っていると思います。それを持っていることを1つの自信として、あるいは土台として、少なくとも東アジアの食糧問題なんかについては積極的にコミットしていくということが求められるんじゃないか。あるいはそういう姿勢を示すことが、市民の誇りにもつながり、さらに安全感にもつながる可能性があるということで、食糧問題などを切り口にする世界の学術会議的なものやっていきたい。

そしてもう1つは、市民に食の楽しさを知ってもらい、そしてまた食を通じて経済の活性化を図るということで、食と花の国際見本市みたいなものをぜひ継続的にやっていきたい。この2つを合わせて食と花の世界フォーラムというような形でやれないかなということで、いま与田委員長にご努力をいただいて、何とか近く実行委員会を作れるというような段階までできているという状況です。

これを大きなたてことして、新潟の姿勢を全国、あるいは東アジアに示す、そして政令市になったら見本市をやることで新潟の活性化に資すると、ただこればっかりしているとあっという間に2年が経ってしまうので、今年、来年とイベントをやろうと考えています。まず国際コンベンションと、そして小粒でも、あるいは国際性が若干薄くても見本市的なもの、これをやろうということで、2年間、実際に取り組みながらノウハウを蓄えて、政令市になった年の秋、2007年の秋にはかなりインパクトのある規模でやってみたいということで、今準備中でございます。

そしてもう1つ、食と花の政令市ということを実際の看板にして売っていった場合、訪れた方からどこに食の政令市があるんだ、どこに花の政令市が実感できる場所があるんだということをしつこく尋ねられて、そのときにお答えができない。

あるいはこの時期はちょっとだめだということでは申し訳ないので、フルシーズンで食と花の政令市を実感できるものを2年間で考えていかなければだめだと思います。

食と花を実感できる舞台の1つとして、鳥屋野潟南部の清五郎にある7ヘクタールちょっとの市有地に食と花のにぎわい交流ゾーンというような、農消交流ゾーンの位置づけを明確にしていこうじゃないかと。これもほぼ内部では方向が固まりましたが、行政だけではとてもできないので、ノウハウのある民間の方からご提案などもいただきながら年間相当の人間がそこに集まれる、あるいはビッグスワンや今度造っていただきたいと思っている野球場にいられた方が、その観戦の前後2時間程度はたっぷり楽しめるというようなエリアにしていきたいと。そこへ行けば新潟のすばらしい食の素材を使った料理だとか、お土産にぴったりのギフト、グッズがあり、かさが張るもの、あるいは重いもの、農産品、魚、そういうものをすぐ宅配便で発送できると。

農業体験ゾーンなどもいくつかは盛り込んで、農消交流の新しいメッカにし、さらに花を楽しみたい人はそこで案内を聞いて、新津、小須戸、白根などへ出かけられるようにし

ても良いと思います。

それだけでは食と花の政令市を実感できる仕掛け、仕組みはまだ不十分なんですけど、それを1つ大きな柱として、既存の朝市だとかいろんなものをマッピングしたり、直売所など意識的に整理していくというような形で、食と花が実感できる場面を増やしていきたいと思っております。

そして花の新潟にふさわしい都市空間ということで、四季を通して花の政令市を実感できる、冬の間は新津の植物園に頼ることになるかもしれませんが、それ以外はいろんなすばらしい花の見所があります。これを花のカレンダーにしたり、あるいは田園型政令市を実感できる100シーンのフォトコンテストを開催したり、まずは市民が新潟の新市のエリアにこんなにすばらしい花の場所があり、花が楽しみ、あるいは田園型政令市のすばらしい景観が楽しめることを実感しつつ、2年間かけ情報交換しながら宝物を探し出して、それを政令市になったときにほかから来た人に見ていただけるように準備をしていきたいと考えております。

産学官の連携についてはまた展開の中でお時間をいただければ若干申し上げたいということで、とりあえず。

与田座長

ありがとうございました。今市長がおっしゃった清五郎に7ヘクタールを使って植物園の代わりに農消交流ゾーンみたいなものを考えるとおっしゃいましたけど、そういうふうな場所を決めてしまうと結果としてみると、ふるさと村と同じようなものができちゃうかなという気も実はしてまして、やっぱり街なか全体をそういうふうな持っていかないと、あそこでやっているから、おれたちはやらなくていいみたいになってくると、街全体のイメージとしてみるとちょっと違うかなと、今お聞きしながら実は思っていたんですけども、どういうふうな考えていくか。

ただ初めは植物園からスタートした話が、ちょっと変わって農消交流ゾーンみたいな形になっていくのは非常にいいことだと思いますし、植物園ならさっきの話のように新津にもありますし、同じものを造っていてもしょうがないと思いますので、そういう意味では新しい試みとしては面白いかなと思って聞いておりました。

平沢委員

20世紀の食を振り返ると、食べ物というと普通は安全なのがあたりまえだったのに、このごろは安全ですよと書いてあっても偽装表示であったりと、安全な食べ物を確保するだけでも大変です。消費者は胎児から化学物質にやられていますから、不妊症や今の医学でも治せない皮膚病、呼吸疾患が大変多く出ております。ですから子どもを持つ親たちは安全な食べ物がほしいと必死です。

この新・新潟市には、農業経営者のほかにサラリーマンもたくさんおりますので、それ

らを連携すれば今私たち生活者が求めている、安全な食糧生産が可能なのではないかというお話をさせていただきたいと思います。

ここにいらっしゃる及川先生のご専門のバイオテクノロジーにより、化学物質で汚染された土壌をもう1回洗い直すことができると聞きました。

また新・新潟市は里山もあり農業地域も広いわけですから、バイオマスをたくさん手に入れることはできます。しかし現在のような市場経済では、これらを活用したくても人手が足りなくて、経済の上に乗らなかったんですけれども、これから増えていく60歳~80歳近くのサラリーマン退職者を考えてみてはと思います。

まだお金がほしいという人もいるし、体を鍛えたい、あるいは新しい友と出たい、新しくやりがいのあるものを見つけない、自然とふれ合いたいなど、経済だけを考えない人が多くいると思います。

そういう状況の中でバイオテクノロジーによる有機肥料やエネルギーを使って、循環型農業を実践していき、安全とおいしさでブランド化された農産物、又これを加工して新たな雇用につなげ、今までのような疲弊している農業者を立て直す力にもなるのでは、という気がいたします。

それを考えると、まず新しい市には決して里山を汚染することなく徒歩か自転車で行けるようにしていただきたい。

安心した食料が手に入り、そして定年後もまた体を立て直したり、あるいはもう少しお金を得る職があるということは、とても魅力的な住みたいまちではないかという気がいたします。

与田座長

ということは、今おっしゃるように定年退職した人たち、その人たちを組織化をしようという意味でしょうか。

平沢委員

はい。定年退職した人たちは皆さんばらばらですね。特に新潟県人は私をはじめ1人で積極的に活動するのは苦手ですから、集まれる場所を作ってほしい。

それと、市報を見れば自分にちょうどよい職とありますが、たとえば3時間ぐらい働いて後はそこに集まった人で談議や情報交換をするとか、今までのように8時間労働をしなくてもいいわけです。

与田座長

その場合にそれはNPOではカバーできない。やっぱり市が行政として関わっていかないとうまくいかない部分はありませんかね。

平沢委員

あるという気がするんです。私は。

与田座長

ということはオーソライズされた形で市のほうでそういう団体の場所を用意するということですか。

平沢委員

ありようとしてはそうではなく、自主的なのが一番いいんですけど、少し軌道に乗るまでは行政も入ったほうが新潟県人気質としてはスムーズに集まり、目的を達しやすい。実現できたら今までの職場だけの友だち関係でなく、男女ともとても面白い人たちとつきあいができるし、健康にもいいし、また、いかに食というものを生産することが大変であるかがわかります。これから自然環境も人口問題も厳しくなり、食が非常に貴重になっていくと思います。その厳しい環境の中で農産物を作りますから大切なものとなりますので、小さいジャガイモも、小さいニンジンも、長さの足りないネギも全部捨てずに使うでしょうし、市民が率先してアピールするようになるかもしれませんので、そうなるよう市民に火をつける役目が必要ではなかと。

与田座長

ということは、その役目が行政にあると。ここには産学官と書いてありますけれども、これからは産学官民といわないと。

平沢委員

私も産学官の3つだけではなくて市民も入れてもらいたい。そうしたほうが市民は行政に関心を持ち責任を持ちますし、積極的に参加し活性化して人が増えることは、まちがいきいきとなる大きな力になると思います。

与田座長

ですから、産学官ではなくて産学官民の連携というやり方でやっていかないといけない。そういうふうなジャンルもできてきていますし、そういう人たちをどういうふうにするか。それも少しお金を出した形で、趣味だけやってもらうんじゃなくて農業をやってもらおうと。簡単にいうとそういうことですね。

平沢委員

強制的じゃないほうがいいですけども、そういう場があったら大勢の人が集まると思います。

与田座長

ちゃんとお金を払ったほうがいいんだね。NPOではなくて、きちんとした仕事にする。

平沢委員

お金を支払う力強いNPOも必要です。日本は本当に少ない。健康のためにという人は奉仕活動をと分けておけば、たくさんの方が活動できます。しかし、新潟県人の県民性を考えると自然と活動が起きるのを待っていたんでは難しいと思います。

今まちづくりの時、又団塊の世代の退職の時期、今がチャンスと思います。

与田座長

ということはさっきの市長が言われたような農消交流ゾーンみたいなものも、市が運営するんじゃなくて、そういう人たちから運営してもらうようにすれば金もかからないし、生きがいになるだろうと。そういう生かせ方をしたほうがいいんですね。

平沢委員

運営したいと思っている人、能力のある人もいっぱいいるんですよ。主婦たちも行くんですよ。

与田座長

では関連コメント、大熊委員からどうぞ。

大熊委員

平沢さんの話を聞いていて何を感じたかということ、今まで地域に密着した自治会組織には行政のほうもそれなりに支援してきたわけですよ。一方で、それと違う形でテーマ型でやるというのも、もちろんNPO、NGOもありますけれども、ある程度行政がそこに平沢さんがおっしゃるのようにやるというのも、今までの自治会を作ってきたのと同レベルで考えていいのではないかと思います。

与田座長

おっしゃるとおり。市長が前おっしゃった各地のコミュニティセンターを作っていくというのがありましたね。ああいうところが今までの自治会からコミュニティへと名前を変えるだけでもイメージが変わりますから、そういう中で、コミュニティの中で実際に今おっしゃったようなことをそこに機能として付加していく。あるいはそれを市がある程度誘導してやる。こういうふうになればだいぶ違ってきますね。

大熊委員

そう思いますね。

与田座長

今の自治会はやりたい人しかやってないし、地域によっては組長は誰だかわかりませんものね。だからそういう意味では、この前議論になりましたけれども、今実際に自治会組織はどのくらい機能しているかという話の中で、逆にマンションの管理組合あたりのほうが機能しているという話がありました。マンションはマンションとして管理組合で機能しているものだから自治会に全然入らない。そうするとごみを出す時期も違ったりみたいな話をこの前していましたが、そういう意味ではもう少し大きくりにした形での、大熊先生が言われるような新しいコミュニティに対してそういう機能を付加していかないと、ただ自治会だよと、隣組だよというだけではやっぱりこれからは済まないと思いますね。

では長谷川さん。

長谷川委員

食と花ということなんですけれども、ちょっと市民に食と花という部分はだいぶ遠いような気がしていて、新しいイメージを作って売り出すというところでは市民もやっぱり実感できることがほしいだろうというのがあります。前も話をしたような気もするんですが、公園とか道路か学校での花育てなどから、身近に育てましようみたいな部分がないと、どうもうまくいかないんじゃないかなというのがあります。それが商店街であれば花を飾るとかという部分はたくさんあって、それで競うというのは出てくるのかなという気がしていて、それは町内会でも同じで、そういう花の飾るといふ景観づくり、まちづくり的なものを含めてやれたら面白いだろうなというのは感じています。

もう1つは、花も花卉を育てるといふ人たちも大事なんですけれども、既存のものを付加して花がサポートするといふところももっとあってもいいのかなと。それは園芸療法みたいなものも含めて非常に重要なことだと思っていて、新しくできる市民病院とかにも花壇を造っていくとか、さすが食と花の新潟は違うな、といふところが意外なところにたくさん見え隠れするといふなと思っています。できるだけそういう公園の緑地化とかそういうことをもっと一生懸命やって、新潟市って緑の塊がないとずっと言われ続けてきて、それでりゅーとぴあも緑地化していくといふような話があったといふような経緯を聞いていますので、新しい景観もつくっていこうよといふ話ももっと出てきてもいいんじゃないかなと思います。そうなったときに、そういった人材がいるのかといふ話がやっぱり出てきます。

与田座長

市には公園水辺課があります。



長谷川委員

あるんですが、それ以外に学生の時分から育てていこうとか、淡路島にはリタイアメントした人を対象に景観園芸学校というのがあるんですけども、景観園芸という新しい分野における教育研究を行うという話をしていて、最終的には人材も育成する。

与田座長

誰が入るの、そこは。

長谷川委員

大学卒業者等々。

与田座長

高齢者が入るとかそういう学校じゃないんだ。

長谷川委員

そういう学校ではないんです。

与田座長

プロなんだ。

長谷川委員

という人たちもいるし、学びたいという人たちもいるということで、そういう景観園芸というような分野で人材をどんどんつくっていこうというのも、

与田座長

そこはどこが主催しているんですか。いわゆる経営主体、

長谷川委員

経営主体は兵庫県。なので、新潟市もそういう人材をつくれますよと。というようなことが私はあってもいいのかなという気がしています。

与田座長

そのほうは県にやってもらいましょうね。ただ、今の話というのはさっきの平沢さんの話と全く一緒になるところがいっぱいあって、お話しましたけれども新発田市って昔から街を花で飾るのに高齢者の方々が一生懸命やられて表彰されているんですね。新発田の街なかに花を飾っている人たちは高齢者の方々なんですよ。農業よりも園芸のほうが確かに

とっつきやすい部分がある。自分の庭で育ててるんだったら街なかもやってくれと。もともと街路樹の管理なんかも、この前、平沢さんが言われたように、自分の家の前の街路ぐらいは自分で掃除しようというのと同じ発想ですから、そういう形でさっき大熊さんが言われたコミュニティの中でそういうシステムを作っていければ、逆にここでだけじゃなくて、全市全体がそれぞれそういう担当を持っていて、この街路はあんたの担当だみたいなことができなければ、かえって面白いんじゃないかと思いますね。

それからもう1つ、長谷川さんが言われた中で気がつくのは、公園の話がありましたけど、もし新潟が本当に景観をめざしていくなら、今例えば商店街なんかで空き地がたくさんできてシャッター街がいっぱいありますね。値段が下がってきているから、ああいうところを例えば市が買い取って、ポケットパークへという発想があるわけですよ。ニューヨークなんかにもありますけど、街なかの商店街を歩くとポケットパークになっていて、ベンチがあって、花が飾ってあって、そこに木がある。大きな公園をめざすんじゃなくて、街なかに休む場所がたくさんあるという意味でのポケットパークみたいな発想をしていくと、あっ、新潟って商店街の真ん中でも公園があるんだというふうなことになります。これは苦肉の策ですよ。本当はそこに商店があれば一番いいんだけど、店舗の借り手がなかったら、そういうことをやったらいいかなという気も、景観の面ではします。

ポケットパークって面白い発想だと思いますね。ニューヨークなんて結局空きビルを利用して、つぶしてやっているんですね。そういうようなことを考えていく時期かな。ただそれにはコミュニティがきちんとしないとね。

長谷川委員

それと今のお話でふと気がついたのは、殺伐として見えるところに花があるというのはいいなと。駐車場って緑がないわけですね。新潟はそういうところに花があるという、こんなところにもというのがあったほうがいいなと思います。

もう1つ、食と花でふっと思い出したのが北海道のラベンダー。ラベンダーづくしというのがあって、私はそういうやり方はやめてほしいなと。ソフトクリームにラベンダーがあり、ラベンダーを使った食事だったり、最後にふるに行ったらラベンダーの湯というのがあったという、そういうのはさすがにやりすぎかなと思います。

与田座長

辟易するからやめてくれと。

長谷川委員

そういう発想ではない、

与田座長

行政が発想すると意外とそうなりやすいということがよくわかります。

長谷川委員

そういうのじゃないほうがいいなと。

与田座長

ありがとうございました。では同じ議論の中で桜内さんはどれを選択されましたでしょうか。

桜内委員

私は花がわからないので、花よりだんごということで、食のほう。私これも例によってこうなったらいいな、こういうのがあったらいいなというぐらいの発想しかないんですけども、それを申し上げます。

私ぜひ新潟でこうあったら楽しいなと思うのが、国際的ないろいろな料理が食べれたらいいなと常々思っています、例えば東アジアということであれば中華街とか、横浜にももちろん大きいのがあるんですけども、やっぱりある程度集積したほうが行きやすいと思うんですね。新潟の場合、ロシア料理とか、韓国料理といった料理街というのもある程度集積したものがあれば楽しいんじゃないかなというふうに思っています。そこで例えば新潟の食材を使ってもらえば、面白い中華料理もできるかもしれませんし、そんなのがあったらいいなというふうには思っています。

それと産業に関係するかもしれないんですが、私がこれまでちょっと大学とかで感じているのは、単にいきなり大学がぼんとできて外国人を呼ぶというだけではなかなか国際化できないんですね。どこにネックがあるのかなと考えてみると、やっぱり大学の教員というのは家族がいたりするわけなんで、インターナショナルスクールというか、子どもの教育というのが外国人を呼ぶ上で大事なポイントになってくるかと思います。

例えば大分に立命館アジア太平洋大学があります。外国人が半分くらい、日本人も半分くらいと、なかなか野心的な学科を作っているんですけども、そこに知り合いの外国の学者が教授で来ないかといわれましたが、結局二の足を踏んだのは、子どもの教育なんですよ。インターナショナルスクールもないし、1人で行ってもつまらないしということで。

なかなか地域にとけ込めないのが、僕がさっき言った中華料理、ロシア料理、韓国料理を食べてみたいというのと同じような意味で、インターナショナルスクールがあったりすると非常によいのではと思います。

与田座長

いわゆる根づくということですね。外国人が家族として。

#### 桜内委員

新潟の人はどうも港町だからか、けっこう開放的だということを聴くんですけども、そういう人たちとうまくやっていけるところもあるんじゃないかなというふうに思っています。産業というか、産学官の連携というか、インターナショナルスクールは産学官の連携までいくかどうかは別ですけども、

#### 与田座長

連携にすればいい。

#### 桜内委員

少なくとも子どもを持つ親が大学で研究するときに、そういうインフラというのがついてこない、なかなか口先だけというか上辺だけになっちゃうということなので、そういうインターナショナルスクールもあつたらいいなと思うところが2つ目。

3つ目が、これはちょっと単なる受け売りなんですけれども、東京の港区で六本木ヒルズができた後に、外国人がけっこうバスとか乗れないというので、少人数しか乗れない小さいバスで、ちいバスというのを港区がやっているんですね。非常に簡単な仕組みで、100円で決まっていて、ぐるぐる回って15分おきに必ず来る。

新潟に限らず全国どこでもそうなんですけれども、バスの運行間隔が時間帯によって違うとか、あるいはルートも違うですとか、新潟学校へ行こうと思っても内野に連れていかれるとかあつたりするんですけれども、まちの狭いところで移動する手段としてはそういうのはけっこう利用する人も多いみたいですし、特に港区というと大使館とか多い所ですので、必ずバスの中で英語、中国語、韓国語、その他の言語でアナウンスしているんです。非常に面白くて、子どもなんかも乗りやすくってそういうのがあつたらいいなと思います。

4つ目が今まで言ったことのまとめみたいなものなんですけど、私が外国に留学で行ったときに、日本人だと、おっと思うようなことがあつたんですけども、アメリカの大学ではミッションステイトメントとかありますが、ただバニューというのを最初に決めるんです。この大学は何を求めているのか。僕が行ったのはハーバードなんですけど、ハーバードでそのころ標語にしようというのがあって、多様性というのをずっと言っていたんですね。ダイバシティというんですけど。それをすごく尊重したい。学校側が具体的に何をやっているかという、結局マイノリティをなるべく多く入れるとか、あるいは外国人を入れてやったら多様性があると、当面目先の教育の効率というのは下がるように見えるんだけれども、長い目で見るとお互い触発されるところがなくて、むしろ新しいものを生み出すという、そういう信念を持っていて。僕は外国で暮らすのは初めてだったんですけども、びっくりしたのは日本ってどちらかというと効率を追求するためにみんな一緒にという感じがあるんですけども、全然逆の発想なんですね。

ほかの国とかを見ると多様性というのを尊ぶというのは、特に日本は欠けていることだ

し、逆にいえば日本にとって、大事なことなんじゃないかなと思ひまして、さっき言ったようなこの新潟という地の利を生かして料理、それから学校とかあったらいいなと思ひます。

与田座長

ありがとうございます。国際料理街は実は新潟はあったんですよ。なくなりましたけど。日銀の脇にフランス料理屋、アメリカ料理屋、インド料理屋、ロシア料理屋あったんです。いつの間にか消えちゃった。なぜかというやっぱり商売ですからペイしないと消えていっちゃう。そうするとやっぱりそこに行政としてからむことが必要なのかどうか。市の戦略として、そういうものを維持していくために、そういう場を提供する必要があるかどうか。その辺のところはどう思ひますか。もうあとは自由に任せたほうがいいのか。

ただこの辺が、先生一番最初来られたとき、新潟はどこで飯を食っていいかわからないというのが一番初めのテーマでしたから、案内が悪いんじゃないかというところから始まれば、今みたいにここは国際料理で何でもあるよというところがあればできるでしょうね。

だから横浜の中華街のようにそういう場所がきちっと決まるということも必要でしょうけど、それはどちらかという市がそこまでかわれるかどうかというのは難しい点だなという気がお聞きしててちょっとしました。

あとインターナショナルスクールに関しては福岡が飛行機会社を誘致したかったと。飛行機路線を取るときに子どもの学校がないとパイロットが来ないんですよ。それで福岡はインターナショナルスクールについて検討を始めたという話を聞きました。

さっきのスニーカーバスみたいな短い区間をぐるぐる回るやつについては、新潟にもあるんですが、実は新潟の人も使いにくい。どういう路線を走っているのか、そこに何があるのか。この停留所は今どこなのかというのが全然わからない。結局バスの一番弱みというのは路線がきちっと確定してない。あるいは路線がわかってても地元の人しかわからない。それがきちっとわかるようなシステムが広報できれば、今おっしゃるようなことは可能かなという気がします。軌道系だったら路線がすぐわかるんですけど、バスの場合にはしょっちゅう変わりますからね。このあたりが問題かなという気がします。

大熊委員

その点だけ。浜松は特別にバスを赤とか色を変えて、それも小型にして 100 円でぐるぐると回って、それはもう駅を降りたらぱっとわかるようにしてあるんです。あれわかりやすくていいです。

与田座長

新潟のスニーカーバスは全然わかりませんものね。

及川委員

金沢にもそういうバスがやはりあるんですよ。

与田座長

それは市に言わないで新潟交通に言うんですかね。

及川委員

だから市営バスを別につくればいいんでしょうけどね。

与田座長

採算が合わないと言っていますよ。

及川委員

交通機関に競争がないからだめなんですね。結局それが新潟の交通のためになった1つの大きな要因です。

与田座長

一番競争があるのはタクシーだそうですから。今のお話、国際的な料理って、そういうブロックについてどうやってつくったらいいと思いますか。

長谷川委員

募集する。

与田座長

募集するんだったら市が場所を確保しなければならない。そしてここに入った場合、例えばこういう料理屋だったら地代を安くするよとか、そういうインセンティブがあって誘導していくようなシステムじゃないとこないと思います。そのあたりで市として運営する、市が手を出すと大体ブーカじゃないけどうまくいかないから、最終的に市が経営するんじゃなくて、ポンと切れるような形でのインセンティブでやっていくほうがいいんだろうね。きっと。箱物運営した瞬間にだめだと思いますね。行政は。

大熊委員

最近行ってないんですけど朱鷺メッセの脇のラーメン街ができましたよね。あれはどうなんですか。

長谷川委員

あれはあそこで働いている人たちはあまり食べにはいかないそうですけれども、私が行っているときはかなり行列を作って、イベントに来ている人たちが来てというような形ではやっているんですね。だからお昼時はかなり並びます。

与田座長

あそこに行けばあれがあるとわかっていれば、けっこう場所としては桜内さんがおっしゃるようないいんですよ。本当はやっぱりどこかに作るべきなんだろうね。だから新潟市が清五郎あたりどうですか。国際ストリートなんかを造ったら。

篠田市長

行政がやると失敗するから、与田さんからプロポーザルをしてもらいます。

与田座長

だから場所だけ提供するし、経営は民間だと。

篠田市長

当然その考えです。そしてあと、これは朱鷺メッセが先にやったので新潟市はやらなかったんだけど、並べておいて1年間契約だよという食のチャレンジショップをやればいいじゃないかと一時検討しようかなと思う時期がありました。基本的にうまくない、評判の悪い人を1年で入れ替えていく1年契約という、チャレンジショップ形式でやればできると思いますよ。

与田座長

場所をどこに用意するか。

篠田市長

あとはやっぱり我々とするとな新潟島、街なかの活性化というときに、やっぱりそういうものを考えていく。朱鷺メッセがラーメンをやってこっちですぐやるというのはちょっと。ほとぼりを冷ましてから。

与田座長

やる時は両方がうまくいけば一番いいんですからね。ラーメンの発想としては横浜のラーメン街の発想ですから。

#### 西條委員

食と花のPRなのですが、やっぱりアピールするにはある程度目で見え、市民が自分たちで食と花と納得しなければなかなかうまくいかないと思います。目で見えるものというのと、ある程度ボリューム感がほしいなと思ひまして、例えば西インターから清五郎のほうに行つて、新津に行く磐越道から見下ろした景色、あそこを花の回廊みたいなことができないかなと思ひました。

例えばあそこは田園地が多いですから、畑の脇でもいいですし、水路とか道路も多いので幹線道路沿いに花を作るでもいいですが、上から見下ろしてバーンと広がっていて、花があるというのはやはりイメージ付けになると思ひます。

#### 与田座長

そこまでいったら、ナスカの地上絵のように上から見る、航空写真を撮ると図が出てくるような。

#### 西條委員

それでもいいんです。あんまり大きいと点にしか見えないので。磐越道だったら観光客も通りますし、市外の方も通るので、磐越道から見た景色というのを生かすことができたらいいなと個人的な意見なんですと思ひました。

それとあと自分自身、さっき長谷川さんのお話で、食と花はちょっと市民から離れている感じがあるというのがありましたが、私もちょっと唐突かなという気はしています。

食のほうについても、外向けにアピールする前に、内向けのアピールのやり方として、例えば地産地消で地元の産物を地元で食べる、小学校の給食に使っていけると思ひますが、どの程度使っているのか、その辺データを公開していつて、目で見えるような形で市民が、あっ、自分たちのまちは食と花なんだと思ひえるようなことをしていく必要があるんじゃないかと思ひました。

最後3点目なんですけど、せっかく新潟市は高速交通網がありますし、りゅーとびあには福島とか山形から人が来るような、お能とかいろいろな文化がありますね。ちょっと周りに行くとグリーンが多いので、グリーンツーリズム的な要素もあつて、おしゃれな都会的な楽しみもあるよという、そういった外向けの売り方をしていくのは新潟しかできないんじゃないかなと思ひます。それから内向けには、地産地消を進めていつて目で見えるような。

あと上から俯瞰した花の回廊があつたみたいな景観と、私はこの3点があつたらいいなと思ひてきました。以上です。

#### 与田座長

上から見たやつは誰が造るんですか、それは。コミュニティでやってもらわねばだめだ。



西條委員

その部分もあるでしょうし、

与田座長

花植えるのは手間がかかるじゃないですか。毎朝水やりしなければだめですよ。

西條委員

西バイパスを通っていくと、西川沿いの堤防に勝手に生えているみたいな、あの菜の花系の、簡単にできるところからでいいと思うんですけど、本当に磐越に乗ると下が全部見えますので、今は冬になると枯れた田んぼみたいな感じなんですけど、そこに花という要素が入ればなかなか魅力的なというか、ぱっと見て花のまちなんだわというボリュームのある景観になるかなというように思いました。

与田座長

つまり戦略的に新潟に入ってくるときに新幹線なり、車なりでもって見える場所にそういうシンボリックな部分を造ると。

西條委員

ボリュームのある、

与田座長

それからもう1つは、長谷川さんもおっしゃっていたように新潟市民が食と花とってないと。

篠田市長

いま思っていないのは当然で、今までの新潟市と今度の新市は全く違う姿になるんです。その新市の姿はこうですよというのを我々が皆さんにお示しして、そしてそれを皆さんに見てもらって、そして政令市のときはこういうようにしましょうというステップを踏まないとい。

政令市が成熟するまで相当時間がかかると思います。最低、合併建設計画が終わるころ、1つの成熟期というふうに我々は考えなければだめだけど、その時と政令市の入口のときとはちょっと感じが変わっているし、政令市の入口のときにある程度の具体的な短期の目標というのを示さなければだめだけど、その上でめざしている成熟したときの政令市においては、市民が本当に花を楽しみ、新潟の食に誇りを持ちというふうになっていただきたいと思います。我々は多少データを先にもらって見ているわけですけど、その部分で今の市民感覚とずれているじゃないかと言われると、そうですね。

与田座長

それは間違いないと。市長がおっしゃるように、自給率が 65%の政令市って他にはないと。他は 0%のほうが多いんでしょう。

篠田市長

ほとんど 1%未満だと思います。

与田座長

そうですね。そこでもって 2けたの数字を持っているという。それは大きい。

篠田市長

先輩政令市の中では最高で 8%ですから。

与田座長

そういう意味では 8%はトップなら、うちなんかいっぺんに 50%超しちゃうわけですから、そういう意味じゃ本当に画期的なんですね。こういうことを市長は今までアピールしてもらわなければならない。

篠田市長

やっとそれが最近わかったのであっちこっちでしゃべっています。基本的にそういうインパクトのある数字を市民にこれからどんどん知っていただく。

与田座長

たださっき給食の食材の問題なんかも言われましたけど、そういうものを市が公表していくのと同時に、市として積極的に使う。そうすると、例えば今の食がそうですけど、花だって、新潟市の市立小学校はすべて花に関して関心を持たしていますよと。そして高齢者と一緒に自分のまちの前の花に水をやりましょうとか、校区にそういう場所を作りましょうとか、そういうことを市ができる部分でいうとやっぱり小学生、中学生。それからやっぱりさっきのコミュニティの自治会とかだと思しますので、ああいうところを使って市全体にそういうのを浸透させていく PR がいるんじゃないかと思えますね。

篠田市長

西條さんのお話、大変私は大事なポイントだと思って、やっぱり田園型政令市だとか食と花の政令市だとか、いくら言葉を言ってもなかなか伝わらない部分があるので、じゃあ田園型政令市を目指してこういう政策をやりますというので、例えば食糧自給率のアップにつながるような、あるいは食糧自給率向上をめざしているねという新潟市の姿勢がとな

がる、伝わるようにするには、私は学校給食というのは大変重要な部分で、これをマニフェストで考えております。

大熊委員

新津へ行く途中で、バイパスの脇の通りにキンケイ菊がばーっと咲いていたことがあるんですよ。キンケイ菊をどう評価するかなんですけれども、外来種なわけです。道路公団が使いやすいというので導入したものなんですけど、やっぱり何の花にするのかということにはかなり慎重にしていかないと、単純に花にボリュームがあればいいというものでもない。

与田座長

さっき土手の話で、土手に植える花というのはどういう花がいいんですか。ただ昔、加治川の土手にサクラ植えて、土手壊しましたけど、

大熊委員

サクラいいですよ。

与田座長

そういうものを専門家から話して、

大熊委員

それは国土交通省ががんとして堤防に植えさせないから困るんですよ。現実植わっているんです。鳥屋野潟だってサクラの木が堤防にある。そんなに反対するならあれ切れって指示出せと僕は言うんだけど、指示は出さないんですが、

与田座長

加治川のときはサクラの根っこが土手を壊したというがあれはうそだと。

大熊委員

今、福井がそれで、福井の足羽川の脇がすごいサクラなんですよ。この前水害があってこの桜のあるところ破堤しなかったのですが、切るか切らないかと今もめていますよ。僕は切るなとっているんです。

与田座長

土手の専門家がそう言うんだったら。専門家としてはどういう花を植えたらよいですか。

大熊委員

僕は外来種でなくて、地元種が良いと思います。例えば母子草とかいろいろ勝手に生えてくるんですよ。

与田座長

これ勝手に生えてくるんですか。

大熊委員

勝手に生えてくるんですよ。もうネジバナだとか勝手に生えてくるのがいっぱいありますから。

与田座長

市役所って花があるんですか。花花言っているわりにはあんまり花を見ませんね。やっぱり新潟が花の都だったら、市役所に来たときに花くらい見せなかったらだめですね。

本当に花は世話しないとだめだから、世話するシステムをさっき平沢さん、長谷川さんがおっしゃったような、コミュニティとか高齢者とか小学生とか、そういうところで組織的につくっていかないと花はもたないですよ。

長谷川委員

中国なんかは沢山の人がいるから、そういう人を使って、本当に1ヵ月ごとぐらいに植え替えをするぐらい余裕があるんですよ。だからいつ行ってもきれいな花が植わっていて、すごく景観がいいという話を聞くと、人手がかかり、お金がかかるんだなというのがあるので、やっぱり花とってそれだけ売り出すというのではなくて、そこに携わる人をつくらないと。

与田座長

今まで日本人という自分の庭ばかりきれいにしていましたが、これからは、自分の住んでいるまちの価値を上げるために、自分の庭だけじゃなくて街路から始めてその地域の価値を上げていく。ここは住みたいと思わせるんだったら、そういうところに投資していけば、最終的に自分の所に住んでいる価値が上がるんだよね。そういう論理循環をつくってやらなければだめなんだな。ところで母子草って在来種ですか。

大熊委員

これが在来種かどうかは知らないけれども、昔からある。

それから、例えばよくあるのでマンテマなんていうのもあるんですが、赤い花が咲くんですけども、これは調べると幕末の外来種だとか、そういう面では長い時間過ぎていま

すから固有種的です。

与田座長

新潟の市の花ってあるんですかね。

篠田市長

チューリップ、

与田座長

新潟市の花はチューリップだけ。

大熊委員

木は何だけ。

事務局

木は柳です。

篠田市長

母子草は今度小林幸子さんが合併記念歌で歌う歌詞に書かれています。

与田座長

それじゃあ、それちょうどいいじゃないですか。母子草を市の花に指定すればいいじゃないですか。

大熊委員

それはよく調べて、

与田座長

及川先生お待たせしました。

及川委員

1つは今ずいぶん食の話が出て、安全の話が出ているんですが、地産地消や有機栽培と安全は全く別の話で、地産地消だから安全という保証は何もない。有機栽培だと、無農薬だから安全という保証は何もない。ところが皆さん有機栽培、きのうも新幹線で東京へ行くときに、売り子が一生懸命有機栽培のコーヒーですと言っているんですね。そうするとみんな有機栽培だから安全だという感覚を持ってしまおうんですけど、あれは全くうそなんで

すよ。

だから新潟市が田園型政令市となるときに、やはり新潟は本当の安全というものをめざすんだという。安全ということは健康な作物を作ることによって、人への安全が保たれるということです。

ですから結局有機栽培をやったからって不健康な野菜たくさん作っているのですから、そういう健康な野菜作りをするためにはどうすればいいか。これは農業の専門家に任せなければいけませんけれども、やはりそういうところからきちっとやらなければいけない。

そういうためには新潟市の衛生研究所できちっと栄養成分から、農薬から、すべていろんなものをきちっとして測ってやれる、そういうシステムまで組み入れないと本当に安全というものが保たれない。

不完全な有機堆肥を使うと、食中毒細菌や硝酸塩濃度の高い野菜ができて、むしろ恐いんです。

だから、安全、健康な野菜や米づくりをきちっとやっていくということまでも考えないと、単なる地産地消、あるいは有機栽培と言ってもだめだと考えます。

それで実はちょっと今プロジェクトを作りかけておるんですけども、ある大手の物流や行政と組みながら、その安全なものという保証をする作物りなり、食べ物の流通システムを作ろうということで、何人かで動いているんですけども、やはり安全というものの保証ということまでやるべきだろうと思います。

学校給食に地元で採れた野菜だから安全で、学校給食に使ったら子どもが健康になるというのは大間違いだと思います。

与田座長

今の安全の話ですけど、僕らから見ると安全というのは、かければかけただけ切りがないので、どこかで歯止めしないと。この前テレビを見ていましたら安全でまずいものと、危険でおいしいものとどっちを食べるか。みんな危険でおいしいものを選んでしまうんですよ。

あんまり安全安全ばかりいくとコストばかりかかって、新潟の食は安全だけどまずいみたいな話になったらどうしますか、先生。

及川委員

安全ということはコストが高くなると考えるのは間違っています。

与田座長

まずかったら、

及川委員

いや、これは逆で、安全なものを作ると非常に安くおいしいものが出来上がるんです。現状はむしろお金かけてまずい作物を作っている。

与田座長

それはわかりやすいですね。今は金をかけてまずいものを作っていると。

及川委員

そうです。だから私が言いたいのは、そういう何も無菌の野菜を作れということではない。ちゃんと考えてやっていけば、安全で安くおいしいものができるんです。

与田座長

逆にいえば今は無理して作っている部分があると、

及川委員

そういうことです。それを言いたいわけです。だからそういうことで自然体の中できちっと作っていけば、安くおいしいものができます。

与田座長

その代わり、安全だと見た目が悪いとかそういうのがあるんでしょう。見栄をよくするんですか。

及川委員

逆なんですよ。安全で健康な作物ほどいい形になるんです。だからいいものを作る、あまりコストをかけずに、いいもの、安全なもの、そういうものを作ろうとすると本当にいいものができるんです。

与田座長

逆に形がそろってくると。平沢さんがいつも言っているように、出来が悪いけどおいしいってあるじゃないですか。格好は悪いけど。キュウリとか。

平沢委員

自然界だからみんな都合のいい同じ大きさのものばかりはできない。小さいのも大きいのも、長い、短いのあるけども、それは消費者が農業をわかればこういうのもみんないただく、

及川委員

別に安全なものを作るために高い金をかけるわけではない。真面目にしっかりと、科学の要素を入れて作れば、きちんと安くいいものが出来上がるとこういうことです。

与田座長

例えばいいものを作っている人の話を聞きますと、例えば枝豆なんかはすごく手間がかかるんですね。水入れのとき、水引のとき、手間かけて夜中の2時、3時に起きて見ねばだめだ。そこまでやらないとだめだというところに、今のイージーに作っていったいいものを作るという考え方ができてきたわけですね。今兼業農家が増えている段階でいえば、その手間をかけてやる、本当のプロの農業者を育てる土壌が本当に今この新潟の地域にあるかという、一生懸命苦労して作っても、結局化学肥料をぶち込んで作ったやつにかなわん。売れない。そういうことになったら結局同じことが起きますよね。このあたりのところを、そういう人とコラボレートしながら育てていってもらわなければだめだし、そういう商品が売れるような流通システムを置かなきゃだめでしょう。この辺がこれからの課題では。

及川委員

流通システムと一緒に組んでいかなければならない。だから物流機構と一緒にやっていかなければいけない。

与田座長

前にコメの凶作の時期があって、あのときに青森で全然作柄が落ちなかったという人がいて、聞くとすごく細かく水入れ、水出しをやっているんですね。ものすごい手間をかけている。そうやってやると本当にああいう凶作でも避けられると彼は言っているわけですよ。プロだからやってきている部分というのは実はあるんじゃないかという気がします。

一方で、消費者のニーズがそうなっているから仕方なくそうなっている部分があると思いますね。

及川委員

だから今現実に農業者がそういうことをやりたいんだけど、消費者がそれを求めない。消費者から逆にそれを求めなければ農業者も育たないと言っていますね。

与田座長

だから消費者が生産者を育てるわけですね。簡単にいえば。



及川委員

そういうことです。消費者が利口になることによって生産者が育てられる。

平沢委員

そういう情報があんまり伝わらない。ただ安いか高いかという、小学生でもできる商品の選び方しか消費者には情報がない。

与田座長

それは日本の流通システムにも問題があって、例えば農家の人たちが自分で出かけていって店を開いて売っていればすぐわかるわけでしょう。ところがそうじゃなくて全部農協が吸い上げて流すとか、でかいところへポーンと行っちゃうから顔が見えない。だから今店頭では、誰が作りましたとか生産者の名前を書かなければだめでしょう。

及川委員

そうなんですね。

与田座長

新潟の地産地消というときの流通システムについても、今及川先生とか平沢さんが言われるように、消費者の声が届くようなシステムができているかということそんなことはないかもしれない。我々のひとりよがりかもしれない。

及川委員

たとえば、坂井輪花子さんが作った女池菜だよって写真入りで出ていますけど、それはいいものかどうかはわからない。その保証にはならない。

平沢委員

でもこのごろ微量な化学物質の計測ができる計測器が安く出てきましたでしょう。先生のおっしゃる健康な作物の差というのは人間では判断をできないから、検査機器でしっかり測って、それを新潟市が管理するとか、そこまできなければだめだと思います。

与田座長

わかりました。大熊先生。

大熊委員

私はまず食のほうではやっぱり新潟の場合はすでにコメと日本酒と料亭というのがあるわけですから、これを徹底的に売り出すと。日本で売り出す必要はなくて、世界に向けて、

日本酒なら新潟だよというふうに世界中が思うように。ワインならどこかあるわけですから、日本酒といえば伏見だとか灘だとか言わせない、新潟だと。現実に日本酒は外国で飲まれ始めているんです。

この前韓国へ行きましたが、日本酒をお土産に持っていったら、すごく喜ばれた。

ともかく世界に日本酒を売り込むということで、日本酒といえば新潟だというブランドのイメージを早くにつくり上げる。僕はそれは行政の責任で、仕事だろうと思うんですね。新潟に世界の食があってもいいんだけど、ともかく新潟に来れば日本食と酒とおコメがおいしいという、そういうものにしてほしいというのが1点。

それからもう1点、昔は内野といえばウナギだったんでしょう。最近タコのしゃぶしゃぶがやり始めているけれども、ともかくウナギだったんですよ。私としてはもう一度、ウナギを復活させたいし、新潟は水都といわれているんだから、水都というものとの関連の食ということをこれから心がけて行って、そういうものを作ってほしい。

あとジュンサイも昔有名だったけれども、ジュンサイも全然だめになってしまった。

与田座長

食べる人がいなくなってきた。知らない人がいる。

大熊委員

だから、もっとあって出ているればジュンサイはおいしいから食べると思うんですよ。それとあと、花ではやっぱり花絵がここまでがんばってきたので、例えば白根のたこ合戦というみんなブランドになって、外へ行っていた人も6月には帰ってきますから、花絵もその時期には外へ行った人も帰ってくるといったところまで育てていく必要があると思います。

与田座長

新潟まつりでも帰ってきませんからね。

大熊委員

面白くないんじゃない。だからやっぱり面白くしなければいけないんですよ。阿波踊りなんてみんな帰ってくる。

与田座長

新潟まつりって義務感ばかりなものね。大変ですよ。

大熊委員

あと、私の名刺は麦っ子ワークスという福祉のところでやってもらっているんですが、

そこで頼むと押し花の付いた名刺を作ってくれます。花というときに大きな花ばかりじゃなくて、小さな花で普段目にすればきれいなんだけど、目にしないというか、みんな全然相手にもしてない花がいくらでもあるんですね。そういうものを掘り起こしてって、皆さんが名刺に使って、

与田座長

少なくとも市の名刺は自分の好きな花でやると、

大熊委員

1枚30円。福祉のほうに頼むと。

与田座長

そういう運動から始めないと花と食の新潟にならないですよ。

長谷川委員

今花絵の話なんですけど、特定のところだけでやっているという印象があるんですね。あれ車道でやってみたら面白いんじゃないか。思い切って萬代橋と通行止めにしてやってみるとかいうくらいになるとだいぶ違うんじゃないかな。

与田座長

萬代橋を止めるのは県警ですか。まつりの行列、あそこに踊りにくるのだって大騒ぎした。県警は大変ですよ。だけど気持ちはわかる。だけどそうしたらやすらぎ堤なんていいんだね。本当は。

長谷川委員

見下ろしてわかるみたいなものにしておくというのがポイントなんじゃないかな。

与田座長

スペインかどこかに砂絵をやるところがあるよね。例えば萬代橋から見下ろすところで、砂絵をやってみる。

長谷川委員

そういうふうにしておけば、けっこうそれって参加しようとか、やってみようとかできるんじゃないかな。

与田座長

本当、今一部の人がやっている感じだものね。

及川委員

朱鷺メッセの方と、対岸のみなとびあの両方でやったら面白い。

与田座長

国際料理ストリートがどうなるかわかりませんが、今の話のようにそういうものを作ったり、やったりするとき行政がどこまでかかわれるか。そこが難しいところです。だからインセンティブとしてどういうことをやれるかぐらいのところまでしかできないと思うんですよ。自分で経営したら絶対失敗します。では横山先生。

横山委員

まず食と花ですけれども、花はシーズンごとにもちろん短期間咲くものですよね。1年間通じたものにしないことには訴える力が弱くないんだろうかと思います。それから、誰に訴えるかですよね。老若男女すべてに訴えることをしないことには訴えのインパクト、これも弱くなると思う。

そういうように食と花を結びつけたら面白いとは思いますが、1年間通じたもので、すべての人を対象にして、そして何も新潟市、新潟県だけではなくて、ネーションワイドか、場合によってはワールドワイドで花の祭典を行う。

そうするとどこで行うかということですね。西條さんがおっしゃっておられた自動車道路のとか、それから萬代橋だとかいうようなところがあるでしょうけれども、一番欠けているのは新潟駅、降りて何にも面白くないですよ。あそこで花と食のおまつりを春夏秋冬4回イベントとして行う。そうしてテレビ局や新聞等マスメディアを利用して、これは少なくともネーションワイドで放映してもらおう。そういうようなことをすると食と花が新潟の売り物になろうかと思います。

アピールの方法としてはできるだけ既存の観光資源を上手に使っていくと。例えば日本人は温泉が好きですから、必ず温泉をワンセットにして考えると、それから新潟の場合には雪が売り物でしょうから、雪と花とか、雪と食をワンセットにすると。それから日本人はサクラの花が大好きですから、サクラの花を使うと。

そしてもう1つは、新緑を日本人は好きですよ。それから秋になると紅葉が好きとか。こういうものを自然を上手に利用していくと。私は年に必ず1回、春、秋あえて磐越西線を使って自宅へ帰るんです。あれは何回見ても楽しいものですよね。そういうように、既存のものをうまく利用していく。確か磐越西線、土日にSLが走りますね。そういうように、既存の資源をうまく利用する。

それから、その次の花の新潟にふさわしい観光というところですが、これもお話に出て

いたようですけれども、花もいいけどだんごも必要ですね。花よりだんごといいですから。いかにだんご、それも季節感のあるだんごを用意するか。

1つは自然の旬のものを旬の時期に食べさせるというようなことを考えたらどうだろうか。例えば石油製品になっているトマトなんか、いつが旬か若い子どもはわかりませんよね。

与田座長

石油製品ですか、トマトは。

横山委員

そうですね。あれは石油がなければ作れない。

それから今度は産学の問題に移りますが、具体的に提携可能な産業はと。やはり資本主義社会ですから当然に製造業でありますね。そしてその次に可能性があるのは、これからはマスメディア、通信業だと思うんですよ。エレクトロニクスを使ったもの。それから農林水産業。これも漁業は育てる漁業というのはだいぶしているところがありますよね。

そしてあとは金融、保険ですよ。これはワールドワイドでうまく売り出せる。そういう産業だ。そういうように産業としてはこのような産業が可能があって、私は最初に申し上げたように農業は可能性はないと思っています。それは世界最大の農業国はご存知のようにアメリカ合衆国ですね。農民の割合というのは何%ぐらいかご存知ですか。第一次産業従事者。ほとんど農民と考えてもいいでしょう。

与田座長

減っているでしょうからね、かなり。

横山委員

減っています。2.6%しかいないんですよ。たった 2.6%の人が世界の食糧庫になっているわけですよ。日本の農業関係で一番遅れているのは生産性を上げることですよ。まるで家庭菜園の延長線のようなことで顔の見えるとかなんとか言ったって、どれだけ賄っているんですか。

ですから農業に関しては、何しろ 60 歳以上人たちが、新潟県でも 53 万人いる就業者のうちの 18 万、19 万ぐらいで、3分の1ぐらいいるわけですよ。これは国勢調査によっても前にお話したように、農業というのは老人ができる産業、ないしは老人でなければ食えない産業なんですね。

与田座長

横山先生、今のお話の中でいえば、お聞きしたいのは産業振興の行政と産学、

横山委員

3つ目、その問題です。2番目の産学の連携の問題で、まず一番大事なのは産ですよ。これは産業界が動かなければ誰がどう手を出したって動きませんから、そうすると今風にいうとベンチャー企業みたいなそういうようなものをうまく育てることが必要じゃないか。

大学は先端技術の教育研究をすると。開発をすると。ただしそればかりしていると、大学は実学の府になってしまいます。教養の府でもありますから、それもきちっと押さえておくと。そうしないと今の大学は特に2年ぐらい前からでしたか、

与田座長

独立行政法人ですか。実学実学言っていますから、本当は教養の府としてはどうなるんだと。こういう心配はありますわね。

横山委員

だから新潟は教養の府としての大学を先に打ち出して、そして国際的にそれを売り物にするという方法もあるかと思うんですね。

官のほうは私はできるだけ引っ込んだほうがいいと思う。しかし、産官学を考えるときには後押しせざるを得ません。ですから条件を整備すると。例えば融資だとか立地条件だとか等々の条件を整備して、あとはさっきからお話があったように、企業家が知恵を絞ってやって始めて商売というのはいまよくいくわけです。官でできるんだったら何にも心配ないんですね。

与田座長

官は引いたほうがいいということですか。しかしこの戦略会議においては市がどうかかわりをもってそういう産業を育成していかなければならないか考えなければなりません。

横山委員

規制をできるだけ排除して条件を整えてあげるということです。

与田座長

土台をそろえて条件を整えることが官の目的である。その方向へそのインセンティブとして使っていく。

横山委員

例えばおまつりのときに交通規制がある。あんなことばかりやっているから伸びないわけですよ。

与田座長

おまつりが面白くない。ありがとうございました。

及川委員

官は引っ込めという話ですが、いろんな考え方があると思うんですけど、僕はやはりやり方だと思うんですね。やはり官が産官学のプロデューサーというかコーディネーターとしてしっかりしないとできない。企業と大学の研究者だけでやれとといても、それはまず無理だと思うんです。だから官は引っ込んでいるんじゃなくて、いかに官はうまくそれを調整していくのかが重要だと思います。

官はよく、お金だけ出してあげるからやりなさいとかやりますが、あれが大きな間違いで、それは無駄金使いだと思っているんです。いずれにしろ官がしっかりして、コーディネーターなりプロデューサーとしてのある部分を持つということにやらないと、最初のスタートはだめだと思う。

与田座長

そのあたりがどこまでプロデューサーする役割、さっき横山先生がおっしゃるように、場所を提供してあげる。場を作ってあげる。これはまず大きいと思う。例えばバイオリサーチパークは新津市が造りましたよね。やっぱり市のイニシアチブというのは大きいじゃないですか。だからそういう意味からすると、産業に関していうと、どこまで市がかかわるかというのは非常に重要な問題だと思っているんですが、及川先生が言われるように、市がそういうことに上手にかかわれる人材がどこまで育てているかという問題が1つある。

及川委員

結局そこだと思う。

与田座長

もうやるとなるととことんやってしまうか、任せると全部任せてしまうか。

及川委員

結局、それだと思うんです。やはり市にそれだけのいい人材がいないとできない。

与田座長

これから育てていってもいいわけです。

篠田市長

一緒に育つしかないですよ。

及川委員

そうです。一緒に育つことだと思っんです。それはどこだっていますよ。そういう人材は、

横山委員

反論ではありません。市が条件整備を適切にとおっしゃいましたね。これが一番問題なんです。

与田座長

適切の加減がね。

横山委員

何を持って適切と判断するか。官がやろうとするのは、性格上から資本主義社会の自立的な能力を規制せざるを得ないわけです。

与田座長

それを規制するんじゃなくてコントロールする。まちをどっちの方向へ持っていくかは実は産は考えていない。産は自分の商売がもうかればいいんです。

それに対してこの地域をある方向に向かって形を持っていくためにはどうしても市がかかわらざるを得ないと思っんですよ。そのかわり方、それをどういうふうを持っていくかが一番問題です。

横山委員

それはまず商売がうまくいかいかないかというのは、ご商売をなさっている方もいらっしゃるでしょうけれども、何といたっても立地条件ですよ。人が集まる場所ですよ。

与田座長

それを集めるふうに作っていくという手もあるんです。この前の大規模店舗の問題じゃありませんけど、ショッピングセンターを造れば人は集まってくる。この前も申し上げたように、今までのショッピングセンターの規制法というのは何しろ小さい店を保護するためにショッピングセンターを造るのを反対だという、大店舗の規制法があったわけでしょう。ところが実際には今大店舗を見ると、まちづくりなんです。実際、あれだけの大きなまちが来れば駐車場も必要だ。車の流れも必要だし、周りに植木も必要です。そういうものまで今の大法には入っていないわけですよ。だからそういうものを規制するための枠組みを市が作ってやらないとだめだというのが1つあります。

だからそういう意味では規制は確かなんですけど、コントロールをうまくしないとまち



が勝手にどこまでも走ってしまう。

横山委員

うまくが難しいんです。言葉ではうまくと言えるけど、

与田座長

だからそれについては人材を育てていかなければならない。

及川委員

今までは行政はどっちかという規制、法律にしたがった規制が中心の行政だったけれども、やはり企業的な感覚を持った行政のあり方というのがこれから求められるところじゃないか。

与田座長

市はある程度、まちをどっちへ持っていくんだという理念は持っているわけです。しかし、さっきも言ったように産業界は持っていませんよ。もうかればいい。それをその方向に持っていくための手段として市がやるのはいいよということです。ただそれをきちっとわきまえないと、もうだめな商店街にいくら金を突っ込んだってだめよというのと同じで、難しい部分が出てきますけど、この新潟市を田園政令市、なおかつ食と緑と花というように持っていきたいのであれば、あるいはバイオとか、そっちへ持っていきたいのであれば、市がかかわらざるを得ない。ただそのときのかかわり方が問題だと横山先生がおっしゃるし、私もそう思います。

大熊委員

さっき市長がこれから2年間ぐらいかけて食と花の世界フォーラムをやるとおっしゃいましたが、僕はそういうプロジェクトを立てて、みんながいろいろそこで議論しあってやっていくというのはいいと思うんです。それは本当にささやかだったんですが、萬代橋プロジェクトでも市の職員と我々一緒にやったわけですよ。我々完全な民間、それから市の職員、それから国土交通省と、あと市民にお金を出してもらおうという形で。それから萬代橋誕生祭だとかほかのほうまで波及していきましたが、ああいうことをやる中で職員も育っていくわけです。お互い育っていくんだと思うんです。そういうプロジェクトをきちんと育てて、それをおそらくは食と花のプロジェクトも市だけが1人で先行してもだめだと思うんですよね。

与田座長

実は私、フォーラムの見本市のほうの部会長を仰せつかったものですから、市長にこの

前申し上げたのは、各部門に必ず関わりがあるということです。農林だけじゃない。産業も関係ある。各部門から若手を引き抜いて、ワーキンググループを立ち上げて、その人たちを次2年、3年後のための勉強のために参加させてくださいと、

大熊委員

20代で、

与田座長

どうですか、市長。20代ですって。いませんがね、20代なんてまだ。

大熊委員

いいよ、それが育ててやればいいんだから。

与田座長

30代ぐらいまで、

大熊委員

明治維新をやったのは20代でしょう。

与田座長

今の時代でいうと30代まで入れてくれませんか。

横山委員

明治維新を考えなくても、戦後の経済成長を育てたのは財界人の大御所がパージされたりしたので若い人が実戦部隊になったわけです。それができなかったのが政治だけで、

与田座長

先生そう言われますけど、政治は別としても、じゃあ官はどうだ。僕は官は日本の官はすごく頑張ったと思いますよ。これだけの戦後復興をできたことは、あれは日本の官庁のせいですよ。今までで言えば。

大熊委員

だけど今まさに危ないところへ、

与田座長

それは今まで機能したシステムがもう機能しなくなった。確かに。それは制度崩壊です。

縦割りのそれぞれ分担を決めた官のシステムが今までは機能してきたのが、ここへきて制度的に疲労したんです。それをやっぱり新潟市もちゃんと学んでいただいて、今は縦割り縦割りではやっていけないよ、というところまできているのは、日本を見れば明らかじゃないですか。

大熊委員

だからそのときは縦割りを崩すためにプロジェクトを立てて、横でつなくしかない。

与田座長

そうですね。それは過渡的なものですけどね。

大熊委員

だからそれをいくつかやれば僕は壊れてくると思います。その食と花のプロジェクトもいいですし、もう 1 つ僕はやっぱり掘割再生のプロジェクトを、それをみんな産官学民全部が合わさってやる。そうしてこれを 10 年やる。そうすると僕は変わってくると思う。

西條委員

私今回この部分すごく能力不足なので、NICO さんからいろいろレクチャーを受けてきたんです。ちょっと話が違って申し訳ないんですが、雑談をしている中で NICO のある方から言われたのは、産学官というと NICO さんの会報誌とか見ると大体技術系の話が多くて、バイオリサーチパークさんとか TLO さんとか、やっぱり技術系の話が多いんだけど、せっかく新大があって、新大は文系の学部もあるんだから文系の学部との産学官もいいんじゃないかと思います。

私自身産学官というと理系のほうばかり見ていたのですごくびっくりしたんです。でも確かに新潟市って第三次産業はすごく多いわけですよ。第三次産業はサービス業とか商業とか、ちょっと理系とは違う世界だし、第三次産業というのは普通の市民も起業しやすいですよ。要は創業支援みたいなことをやれば雇用も増えるし、新潟市の税収も増えていくわけだから、理系、技術系の産学官というと普通の市民はなかなか資本がなければいけないので、福祉でもいいし、そのほかの商業系とかでもいいんだけど、文系の学部がどんな学部がどうかわからないんですけれども、文科系の学部と民間の企業とあと一般の市民、一般のこれから起業したい人とかが、絡んで、創業が増えてくるような仕組みができないものかなという話をしていました。

与田座長

NICO さんのところへはそういう話は行ってないんですか。文系のやつは。

#### 西條委員

産学連携のグループが、県の資料をちょうだいというのと、やっぱり技術系がいっぱい出てきたんですよ。全くほかの部門の方から文系の大学があるんだからどうかなという話があって、確かに今まで考えたことがなかったんだけど、チャレンジショップの食品系があったんじゃないかな。新潟市は第三次産業が多いので、文系の学部とも連携をして、創業支援ができるような連携があったらいいなと思います。

あと配付した資料のことなんですけれども、NICOの方が1つのモデルケースにはなるからこれ持っていったらといわれたんです。これ見て思ったのは、企業の学外支援ネットワークがものすごくたくさんあるんだなということです。

産学官の役割というのがあるんですけれども、例えば大学のほうが経営的なセンスをレクチャーするとか、産のほうはやっぱりインターンの受入れをするというような形で加わって行って、官はやっぱり条件整備だろうと思います。

産学官の連携のときには、もう1つの官のほうも実情を踏まえて、それこそ創業支援でも、ちょっと枠を緩めてというのをやっていただく。

#### 与田座長

それはたぶん見直しはしていると思います。不合理なことがあれば、ちゃんと市は見ていますから、たぶん見直しはしていると思いますし、そういう柔軟な対応という部分はこれから官に求められる部分で、産学官の連携をしていくときにはそのぐらいの柔軟性がないと今までどおり杓子定規では難しいです。

#### 西條委員

要は文系的なものにも目を向けていただきたいというのと、新潟市の産業政策は新潟県全体のイメージが決まる部分が大きいので、新潟市の方の話だけ考えないで、県のことも考えた産業政策をお願いします。

#### 与田座長

それは県が金を出してくればすぐ一緒に考えると。県と協力してやりましょうと、ぜひ最後のコメントを。

#### 篠田市長

今まで特に産学官民の話は、こちらが非常に気にしているところをご指摘いただいて、基本的に今の過渡期は、やっぱりネットワーク型、ワーキンググループ型でやっていくのが一番いいだろうと思います。

そういう中で民間の方とか非常にお忙しい方がパートナーになる場合が多いので、やっぱり一番困るのは事務局機能なんですね。食と花のときにも、まさにその話が出ましたが、

やっぱりそういうときの事務局の機能を市ができるだけ担っていく。そして自分も一緒に議論の輪の中に入って、そこで鍛えていただくというのが一番で、食と花の世界フォーラム、これは成功させるか失敗に終わるか、評判にならないか。結果がすぐ出るわけで、結果がすぐ出るものということについて我々は特に一番鍛えていただく場だと思っていますので、そこに20代、30代のやる気のある職員にどんどん出ていってもらって、そしてその中で触発されて育っていく。あるいはもう一つ、やっぱり20代、30代の前半ぐらいの方に武者修行に行ってください。外の世界でいろんな専門知識、あるいはいろんな体験をしていただいて、それをまた行政、市役所に持ち込んでいただくということで、この特に政令市になる2年間、あるいは政令市になったあとの2、3年は相当エネルギーをつぎ込まなければだめだし、そういうやり方で過渡期をつないでいかなければだめだと考えています。

そういうときに、やっぱり産と学というのは大変重要なパートナーです。そして今、民もすごい専門知識を持って、そしてNPOで行動力もあるというパートナーがいっぱいいますし、53万都市であることは我々にとっては最大の宝物ですので、これが今度80万都市になってさらに力をつけて、あるいは田園と都市機能が連携していければ、いろんな展開が出てくると思いますので、そういう力を我々はつないでいくというのが一番大事なんじゃないかなと思います。

そしてNICOの話も出たので、我々これから産業政策、あるいは産業活性化というのもさらに考えていかなければだめなんだけど、もうすでにNICOや新潟大学、ほかの大学もあるということを頭に入れて、これからまちづくりシンクタンクみたいなものを作りたいと思うんです。

あまり人を固定しちゃうと、いくら優秀な研究員でもやっぱり10年経てばどうしても刺激がなければ劣化していく、あるいはお山の大将になっていけば劣化していくわけなんで、やっぱりそういうときにプロジェクトを作って、シンクタンクが事務局をやるというような形にしていきたいなと考えています。

私は産官学民の連携みたいなときに、いわゆる製造業とかそういうのというのはごく限られた部分で、基本的にはまちづくりに、その知恵を総結集しないともうもたないよということをずっと申し上げているので、文系を大いに活用していただき、暮らしを楽しくする、充実させるという面ではむしろ文系の力が大きいので、そういう面でどんどん文系とも連携していきたいし、NICOにお願いできるのはNICOにお願いして、我々は同じようなものをつくらんという形でやっていきたいと思っています。

与田座長

作るたびに組織ができていきますから、今あるやつをうまく利用していくほうが逆にいいんですね。あるいはそれをつないでネットワークにして使うと。今市長がおっしゃるような形で持っていけば、ただNICOさんなんか行きやすいかといえば、起業家を育てる場所としてはなかなか敷居が高い部分がありますので、このあたりのところをお手伝

いできる部分があればいいと思います。

篠田市長

窓口を NICO につないでいくという、

最後 1 つだけ、横山先生のお話には反論ではないんですけども、食糧自給率を私らは大事にしていきたいと思いますが、一方で質の問題でいけば日本の農業、あるいは新潟地域の農業がなくなるとおいしい枝豆、黒埼茶豆も夏食べられなくなるし、冬の楽しみのル・レクチェも味わえなくなる。新潟市民が今求めているのはお中元商戦を見ても黒埼茶豆だし、そしてお歳暮を見ればル・レクチェなんです。これを我々は守り続けて、元気のあるやる気のある農業者を育てるといって徹底していきたいと思います。

与田座長

よろしくお願いします。

横山委員

私も決して農業を切り捨てると言っているのではなくて、生産性を上げていかないことにはだめだよということです。

篠田市長

生産性と付加価値なのかもしれません。

与田座長

つまり食える農業にしていけばみんなやるんですよ。

篠田市長

農業で食っていかなければ困るわけで、この土地がいつか金になるだろうと思っている間は困るので。

大熊委員

それが一番困るんですよ。

与田座長

だからそれにはプロの専業農家が、おれの農業に自信があるというのが出て行けば一番いいことなんです、今それで食えないんですね。食える形に持っていくのが新潟だという、ベースの部分を押さえていけば、いろんなプロジェクトが出てくるとは思いますけどね。

やっぱりこれからの新潟の食もちゃんと食べられる、それから農業も専任ができる農業

者を育てていく場所になりましょう。こういうふうなことです。ちょうど 4 時になりましたのでこれで終わらせていただきます。